

アンティオキアへの福音の拡大

熱狂的なファリサイ派ユダヤ教徒サウロによる教会迫害は教会に致命的な打撃を与えたかのように見えたが、しかし、それは福音の拡大の大きな機会となった。福音はサマリアからカイサリアへと広がり各地にキリストの教会が生まれた(8 :1-11 :19)。

使徒言行録の著者ルカはさらに次のように記している。「ステファノの事件をきっかけに起った迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかつた。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシヤ語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた」(19-20節)。

こうしてローマ帝国第3の大都会に多数の異邦人を有するキリストの教会が誕生し、エルサレムの教会とともに新約時代の宣教の一大拠点となっていった。このアンティオキアで初めて、弟子たちが「キリスト者」(クリスチアノス)と呼ばれるようになった。あだ名というのは一般にいい意味では使われない。しかし、アンティオキアの信徒たちはキリストへの信仰の故に自分たちに付けられたこの蔑称を、むしろ、栄光ある名前に変えた。

アンティオキアの住民から「クリスチアノス」と呼ばれるほど目立った働きをしたアンティオキア教会とはどういふ教会であったか。

第1は、生き活きとして実践的信仰に満ちた平信徒たちによって作られた教会であった。彼らは「迫害のために散らされた人々」であった。即ち、今日流に言えば宗教的難民である。しかし彼らは迫害による逃避行をむしろ福音宣教の機会に変えた。更にユニークな点は、異邦人にも福音を宣べ伝えなければならないという福音の世界的性を把握していたということである。名も十分記されていない平信徒たちの熱心によって、福音は民族の壁を超えて異邦人の世界に浸透していったのである。

第2に、アンティオキア教会は神の言葉に学び、神の言葉に生きる教会であった。アンティオキア教会がバルナバとサウロ(後の使徒パウロ)といふ二人の教師に恵まれたということは何と幸いなことであったことか！ この二人の優れた指導者のもとで信徒たちはキリストの教会の一員として神の言葉によって教えられ訓練され、成長して行った。教会の生命、そしてキリスト者の生命は、神の言葉がいつも正しく聞かれ、正しく従われているかにかかっているが、この御言葉による教育と訓練が、やがてアンティオキア教会を世界宣教の拠点へと変えていく原動力となった。

第3に、アンティオキア教会は与える教会として成長した。パレスチナが飢饉に襲われエルサレムの教会の信徒たちが窮乏の中にあることを知ったとき、彼らはいちはやく援助に立ち上がった(11 :27-30)。生まれて間もない教会が、こんなに早くこんなにも熱心に、遠く離れたエルサレムの教会のために援助を送ることを決定したことに心を打たれる。ここに彼らの「共同の教会意識」、聖徒の交わり意識」の強さを見て感動する。パウロは言う「一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一

つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだ
であり、ひとりひとりはその肢体である」(第1コリント12:26-27、口語訳)